



浄瑠璃・時代物

「**姫山姥**」

◎初演 正徳二（一七一二）年九月以前 竹本座

「八重桐と鬼女に変えた出来事とは……」

あらすじ

平安時代のこと。武将源頼光は、名剣を求めて、渡辺綱を連れ、小夜の中

山に泊まる。坂田忠時の娘系萩は、宿屋の料理人喜之介の助太刀を得て、父の敵を

討つ。敵を討ったその太刀を頼光に献上した手柄で、喜之介は頼光に召し抱えられ、

碓氷定光と名乗る（初段）。

頼光は、権勢を誇る右大将清原高藤の企みで、行方知れずの身。岩倉

大納言兼冬の館では、頼光の許婚沢潟姫の心を慰めるため、煙草売りの

源七を呼び入れ、小唄を歌わせる。そこに親の敵を討つため、家を出た夫

坂田時行の行方を訪ね歩く遊女八重桐が通りかかり、夫に似た歌声を聞

く。館に入ると、果たして源七、つまり時行だった。館の局たちに問われる

まま、八重桐は廓での騒動話や、帰らない夫へのあてこすりを面白おかしく

語る。「離別は敵討ちのため」と怒った時行に、八重桐は、「敵はそなたの妹系萩が先月討った」と責める。時行は恥じて、その場で切腹。その無念の思いが、八重桐の胎内に宿る。鬼女となった八重桐は、押し寄せた高藤方の侍達を追い散らす(二段)。

縁のある、美濃国の能勢判官にかくまわれていた頼光を狙う高藤。判官の養子で、頼光の異母弟冠者丸が、頼光の身代わりとなり討たれる。山中に逃れた頼光は、山を巡っているうちに、山姥となった八重桐と出会う。八重桐が時行の魂を身ごもって産んだ怪童丸は、頼光の家来となり坂田金時と名づけられる。ここに綱・定光・卜部末竹・金時の四天王が揃い、悪鬼を討つため、近江の国高懸山へ向かう。鬼の大將をねじ伏せた四天王は、都に入り高藤を捕らえ、国はめでたく治まる(三〜五段)。

見どころ 今日では「廓話」として、主に二段目のみが演じられます。女性は口数が少ないのが一般的であった時代に、長ぜりふをしゃべらせた点がおもしろく、これは、歌舞伎で坂田藤十郎が得意とした見せ場を取り入れたものです。実際、八重桐の名は、藤十郎の影響を受けた女形荻野八重桐の名を、そのまま借りたものです。人形浄瑠璃と歌舞伎との相互の影響・交流を考える点でも、興味深い作品です。